

5 新潟市北区正尺C遺跡出土の土師器鉢

報告に至る経緯 平成25年度に、新潟県から本市へ譲与された正尺C遺跡の再整理を行った際、平成9年度の試掘調査（第1次・1997120）で出土した土器と、平成11・12年度の本発掘調査（第4次・1999005、第5次・2000005）で出土した報告書掲載土器（〔土橋ほか2006〕のNo.200）とが接合した。報告書では壺と報告されていたが、接合の結果、鉢であることがわかったため今回再実測を行い報告することとした。

出土位置 報告書掲載土器（〔土橋ほか2006〕のNo.200）が出土した遺構は、平成11・12年度の第4・5次調査で確認された周溝を有する建物（SZ439）を構成する溝（SD209）である（図2）。接合した土器が出土した平成9年度の試掘調査（第1次調査）2TはSD209と一部重複しており（図2）、SD209出土の可能性が高い。

報告遺物 口径38.0cmと大形の鉢で、口縁部に最大径をもつ。半球状の体部に頸部が外反したのち段を持ち、内湾する口縁部が直立気味にのびる。口縁端部は尖り気味に收まる。頸部外面には1条の沈線が横位に走る。

調整は、口縁部～頸部内外面ともハケメで、頸部外面が縦位、口縁部外面および口縁部～頸部内面が横位のハケメである。体部外面は横位のハケメのちヘラミガキ、体部内面がヘラケズリのちヘラミガキである。

胎土は0.5～3.0mmの長石・石英・凝灰岩・各種岩石のほか、雲母を多く含む。

まとめ SZ439は報告書で新潟シンポ編年〔滝沢2005〕の6期に位置付けられた〔土橋2006〕。系譜については不明であるが、口縁形態や法量などから山陰の影響を受けた土器である可能性があろうか。なお、頸部外面に沈線が巡る事例として、市内では南赤坂遺跡出土の山陰系の壺〔前山・相田2002〕がある。（相田泰臣）

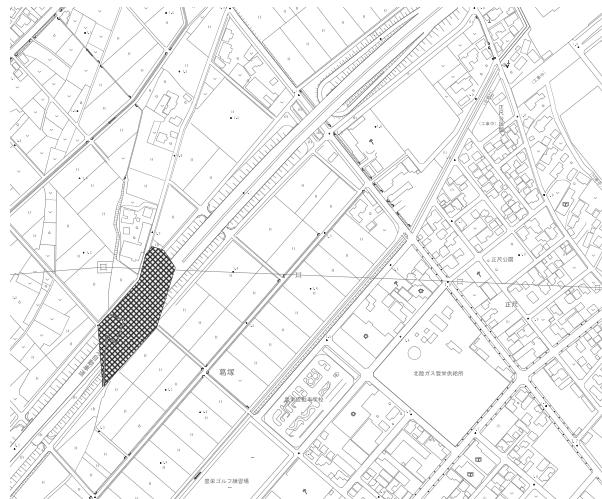


図1 調査位置図 (1/10,000)



図2 第1次調査2T、第4・5次調査平面図 (1/2,500)

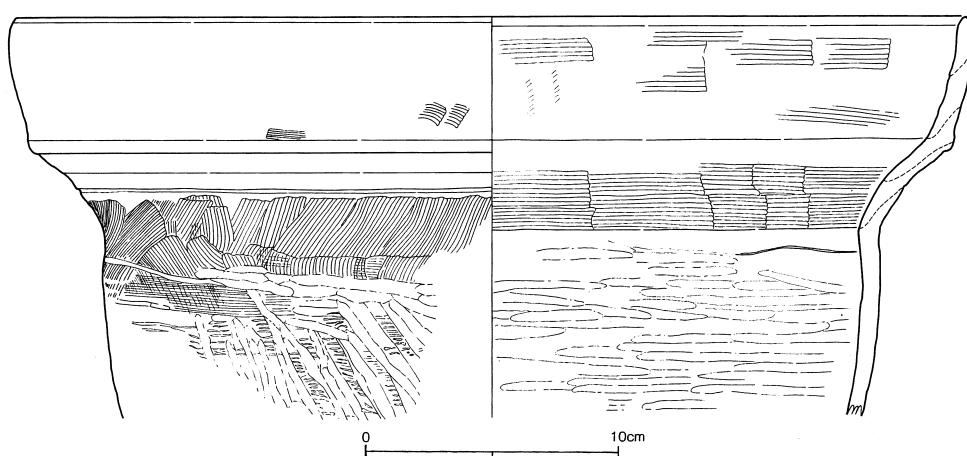


図3 遺物実測図 (1/3)